
グランスウォールの英雄

うましか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グランスウォールの英雄

【Nコード】

N8930Z

【作者名】

うましか

【あらすじ】

クライニアス学園。

それは大陸グランスウォールにおいて多種多様な分野で活躍するエキスパートを輩出することで有名な機関。

この学園を卒業したものを最低でも即戦力として期待できると言われるほどである。

平民層の者は立身出世を目指し、富裕層の者は輝かしいステータスの為に入学を果たす。

物語の主人公コウ・クラシスはそんな学園に在籍する――劣等

生を演じる者である。

第〇話（前書き）

【改訂前】 グランスウォールの英雄 の移転先です。

改訂前から来てくださった方は本当にありがとうございます。
初めていらした方は拙い文章ですが、よろしくお願いします。

第〇話

剣と魔法、武と知恵が交差し、この世界に住まう全てが生まれ降り立つ大陸。

その名を『グランスウォール』。

来たものを試すかのように聳え立つ険しい山、日の光が差し込まないほど生い茂った深い森、生を認めないかのような灼熱の砂漠。吹き抜ける風の行く道が見られる大平原、全ての始まりと伝えられる美しい海、そして何処までも広がり様々な表情を見せる大空。その広大な大地には人間を含む多くの動物や植物、そして魔物と呼ばれる多種多様な存在が命を輝かせている。

この話はそんな大陸で様々を巻き込み、繰り広げられた歴史の一部分。

人々が知らぬ間に生まれた真実の物語。

第〇話（後書き）

2011／12／28

一度移転先としてフランスウォールを12／27に投稿したのですが、誤って短編として投稿してしまっていました。

いろいろと紛らわしいのでそこらは削除し、こちらを再々投稿した次第です。

七十四名のお気に入り登録していただいた方、本当に、本当に申し訳ありません。

削除しないために移転させたのに本末転倒過ぎて笑えません。

胃が痛い……。

第一話

グランスウォール大陸の中央に広がるウィールス平原。

そこは人の手が一切加えられていないのにも拘わらず、敷き詰めたかのように緑の絨毯が広がっている。

何処までも続くかのような地面は真っ平らではなく、小さな丘などが所々あり、遙か先まで見通すことは出来ない。

しかし、急な斜面もないので平原を行くのに難しいことはない。

そんなウィールス平原を日が一番高い時間に緩やかな速さで移動する馬車があった。

その馬車は若く毛並みの良い馬に馬車は引かれている。

車は幌馬車の中には金属の塊のような物が積まれていて、御者台には二人の少年が並んで座っている。

どちらも若く少年からもうすぐ青年と言える程の微妙な年頃であるようだ。

「はぁ……」

二人の内、手綱を引く少年が半眼で正面を見つめたまま、思いつきり大きな溜め息をついた。

その少年の髪は黒い。

王国では髪の色が黒色か茶色の場合は、平民階級である印だ。故に、恐らく少年は平民なのだろう。

瞳の色は、髪と同色であるようだ。

特別容姿が優れているわけではないが、見た目の良い悪いを決め

る天秤があるとするなら、悪いに傾くことはないはずだ。

しかし、現在浮かべる怠そうな表情のせいで、容姿は悪いに傾いていた。

見る者によって意見が変わる容姿である。

背は標準に比べて少しある方だ。が、高い訳でもない。

全体的に良いのだから悪いのだから分らない容姿である。

よく見れば細身だが引き締まった身体が、現段階で確実に褒められる特徴だろう。

服装は下から見て、安そうな薄茶色の皮ブーツに質素な黒いズボン。

平民であるなら特に変わった姿ではないが、その上に着ているものは下とは全く異なっている。

それはフード付きのローブだ。

安っぽさが滲み出る他と違いが滲み出るかのような、純白のしっかりした布地。

前側には閉める為の金のボタン、胸元には金と銀の糸で縫われた何かの紋章。

丈は膝より少し上くらいだ。

フードの縁、袖、襟、肩口には白に映える深い青色のラインが入れられている。

見る目で見ればどっしりした印象と違い、意外に動きやすい作りになっていることに気づくだろう。

例え激しい動きをしても、このローブが動きの妨げになることはないはずだ。

まるで貴族が着るような豪華なそれ。

黒髪の少年の貧相なズボン等々と比べると残念な程に不釣り合いであった。

「なんだよコウ、溜め息なんかついて」

不釣り合いな服装の少年——コウにもう一人の少年が声をかけた。

もう一人の方の髪の色は、コウの持つ黒色とは違い、もう一つの平民色である茶色とも違った。

金である。金髪は王国で権力を持つ階級である貴族の象徴である。少年の瞳は青色で「金髪碧眼」、まさしく絵に描いたような王国貴族のものであった。

鼻筋は真っ直ぐで好奇心を強く宿した目元も、陽気な表情に柔らかな笑み。

コウとは違い容姿は確実に良いと断言できる。

背格好は中肉中背でコウとは違い、別段鍛えたりしているようには見えない。

着ているものに派手さはなく質素なものであるが、黒髪の少年とは違い上質な素材で作成されているのが窺えた。

そして金髪の少年は黒髪の少年と同じく純白のローブを羽織っている。

金髪の少年の服装と容姿は、そのローブは完全に釣り合っており様になっていた。

「もうすぐ学園だから元気出せて!」

陽気な調子で金髪の少年はコウに言う。

それに対して彼は正面を見据えていた目を、半眼のまま自分の隣

に座る少年に向けた。

「ロン……何でこんなガラクタ運びに俺を付き合わせた？」

言葉と共にコウは振り返ると幌馬車に詰まれた物たちを凝視する。
そこにあるのは大量のガラクタの山。

幌馬車の張られた布で出来た屋根すれすれまで積まれている。
移動時に揺れた際の振動で崩れるのではないかと、見ていてひやひやする程だ。

実は半日ほど前まで、コウは休日を謳歌するために惰眠を貪っていた。

そこに突如やって来たロンに叩き起こされたかと思えば、空の馬車に乗せられて、気づけば近くの街まで半ば拉致の形で連れて行かれたのだ。

そして今がその帰りである。

コウの言い様に金髪の少年——ロンが口を尖らせる。

「ガラクタとは何だ、ガラクタとは！　これは宝の山ですうー！」

「いいや、ガラクタだな！　むしろゴミだろ！？」

「ガラクタならまだ使い道がありそうだったのにゴミ！？　ゴミ呼ばわり！？　コウの目は節穴なんだよ！」

そう叫ぶとロンはガラクタ（ロンの主張としては宝）の山から一つ手に取ると、コウの頬に押しつけるように手にある物を示す。

「例えばこれだ！　これは魔力を動力にしないカラクリ時計だ！！」

「いや、近すぎて見えないから……」

コウは押しつけられていたものをもぎ取ると、ゆっくりと観察してみる。

大きさは手のひらくらいで、形は円形である。コウは物価の水準に詳しくはないが、見た感じと触り心地では低価の金属で作られているように思われる。

コチッ、コチッ、と規則正しく小さな音を立てながら針が時間を示しており、見た目の安っぽさを抜けば、世間一般的な時計と毛色の違いはないだろう。

そして、ロンの言うとおり、時計からは魔力は感じられなかった。

「ふうん、つまり、魔石を必要としない訳だ」

コウがロンに時計を返しながらそう言った。

『魔導具』と呼ばれるものがこの世界には存在する。

人間が生み出したもので、物によっては「神をも殺すことすら実現出来る」と囁かれるほどで、その可能性は未知数であり、底は見えない。

大変高価なものではあるが、魔導具があるかないかでは生活での便利さは段違いである。

形はそれぞれで日用品から戦闘用品まであり、用途ごとに適した多様な姿をしている。

時計も本来ならその一つだ。

使い方はその魔導具ごと一つ一つ違うが、共通しているのは魔石

と呼ばれる特殊な石に、魔力を溜め込んで起動させることだろう。

「そう、そこだ！ こいつの凄いところは魔石を必要としない……つまり、魔力を動力としないところだ！」

興奮した様子でロンが説明する。

魔力とは全ての生物が持っているものである。生命力の代名詞でもあるくらいだ。

身体に宿る魔力を全て搾り出す。それは死へと繋がる行為だ。

こ十れは一般常識として深く浸透しており、物心ついた子供なら知っているといっても過言ではない。

では、何故ロンが興奮した様子で手元の時計を褒めるのか。

それは全ての生物が持ちうる魔力だが、それを操作出来るのは限られた人だけだからである。

故に魔力を扱えない者は扱える者——魔術師や魔導師と呼ばれる者達を頼るしかない。

しかし、大体の魔術師達は貴族とその関係者であることが多い。

これは「魔力を操る才が血縁によって受け継がれやすい」ということが関係しているのだが、何故そうであるか具体的な理由は説明されていない。

そしてそのせいで問題が発生してしまう。

現在、特に王国において貴族と平民の間には亀裂が生じている。

魔力を扱えるという優位性から貴族が権利を得たという歴史から、貴族に属する者は平民を見下すようになってしまったのだ。

つまり階級差別が根強く存在しているのだ。

仮に平民が頭を下げて頼んでも、見下している相手のために貴族側の人間は、動かないというわけである。

もちろん貴族全員がそうではないが、平民を見下さない者など極少数だ。

「だけど、これなら誰でも使う事が出来る……!!」

しかし、ロンの持つ魔力を使わない時計ならば、一度手に入れてしまえば貴族に頼まなくてもいいのだ。

「これでみんなの生活が少しは楽になるんだ」

そう言ってロンは最後に微笑んだ。

時計そのものが生活を楽にするとロンは考えていない。

魔石を必要としない魔導具に代わるものが生まれたことが、生活を楽にしていくと考えているのだ。

人が歴史の中で文化を発展させて来たように、このカラクリ時計もまた人々の手助けとなる、大きな存在へと進化して行くだろう。

それをロンは純粹に喜んでいるのだ。

「……お前は本当に貴族様とは思えないことを言うよな」

実家が貴族であるのにも関わらず、平民を『みんな』と言ってロンは笑う。

それを見てコウにも自然と笑みが浮かんだ。そこに先ほどの意そうな様子はない。

いきなり街へ連れ出したりと多少強引なところはあるが、それに嫌気がささないのはこの少年の魅力だろう。

それに気づかないロンは上機嫌なまま、次の品を山から取り出す。今度は拳三つほどの長さの筒だった。筒の端と端にはガラスが張ってあるようである。

ロンは筒の片側に目に合わせると遠くを指差しながら筒の正体を説明する。

「これは望遠鏡といって遠くのものを拡大して、見えるようにするという優れたものだ！あの看板には『ここから北にクライニアス学園あり』って書いてあるぜ！」

もちろん魔力は必要ありません。と付け足したロンの口調は、商人が品を売り込む時のように丁寧だった。

「へえ、魔術を展開しないで遠くのものが見えるなんて凄いな」

一般的に遠くのものを見るというのは、『遠視』という魔術を展開する意味合いである。

そしてどうやらその常識的なものは、少しずつ覆されようとしているようだ。

コウが素直に望遠鏡を褒めると、ロンは気を良くしたのか更に説明を続ける。

「やっとコウもこいつらの良さが分かってきたか。しかもだ、この望遠鏡の素晴らしいところは……」

ここでロンは言葉を一旦区切った。

そしてコウが今まで見たことのない爽やかな笑み浮かべながら彼は言った。

「魔力を一切使用しないから、気づかれることなく覗きができるんだ!!」

ここで何故覗きに魔力が関係するのか説明しよう。
クライニウス学園にはとある二つの魔術によって結界が施されているのだ。

範囲内における魔力の流れを見つけ出す『感知』
設定した条件に当てはまる対象を探し出す『探知』

という魔術が結界規模で展開されている。

通常は術者が魔術を展開して数秒で効果が消えるのに対し、結界規模で展開されると魔力の供給がなくなる限り常時展開されるようになる。

学園ではそういった結界規模の魔術が至るところに張り巡らされている。

特に更衣室などといった場所は念入りである。

これらによって過去、覗きを試みた勇者と呼ばれる愚者達は一人残らず生活指導室送りにされている。

ちなみにこの魔術結界を無効化出来た者や欺いた者はいないとされている。

「近づいて窓から覗けば絶対に見つかる。それは捕まえて下さいと言いにいくようなものさ。しかし、遠くから覗こうにも遠視はやっかいな魔術結界によって阻まれる」

ロンは話しながら拳を握り、そしてそれを天を穿たんばかりの勢いで高々と突き上げた。

「だが、時代は俺に……俺達に味方した！ これさえあれば遠くからの覗きを可能にし、更に望遠鏡はあまり出回っていないから、認知度が低いため警戒される心配もない！！」

ロンの力説。彼は本気である。

ついには口笛を吹きながら、望遠鏡を覗き込みあちこちの遠方を見るロン。

そんなロンを横目にコウは呆れながら溜め息をつく。

先ほど感心した途端にこれなのだから、溜め息をつくのも仕方がないだろう。

「お前はその変態なところがなかったら、普通にいい奴なんだけだな……」

この少年、コウからすると本当に気さくでいい奴である。

しかし、女の子に目がなく、いつも女の尻を追いかけているイメージしか持てないのが玉に瑕だ。

学園に着いたら望遠鏡の存在を流布する事と、女性陣に警告しておくことをコウは密かに決定した。

すると、その肩をいつのまにか静かになっていたロンが、望遠鏡を一つの方に固定したまま叩いた。

「なんだよ？」

「いや、なんかやばそう……」

ロンが望遠鏡を渡してきて遠くを指差す。望遠鏡をどけた顔は青くなっているようである。

コウは意味が分からなかったが、彼の様子から何か冗談を言っているようにも見えない。

黙って望遠鏡と手綱を交換し、見様見真似でコウは指差す方角に望遠鏡を向け覗く。

望遠鏡は遠視の魔術に比べて鮮明さは劣っていたが、何が見えているのか確実に判断出来る程にはしっかりと見ることが出来た。

小さな丘が続くウィールス平原には珍しく、少し開けた場所があった。

そこにあるものを発見し、コウはあれがロンの顔を青くした原因だろうと理解した。

コウが見たものをしっかりと認識した上で、口から出た感想が次の通りである。

「なんでまた……」

そこにあつた光景とはフード付きローブを深々と被った人物が、魔物の群れに追われているというものだった。

コウは静かにそれを見つめたまま、情報を脳内から引き出す。

ローブの人物を追う魔物の名前はドリークという。

爬虫類を思わせる鱗の体躯を持っており、平均的な体長は七〜八歳くらいの子供くらいである。

舌を閉じた口先からチヨロチヨロと出す仕草は、舌先に魔力を感じ取る器官があるため、それによって獲物を探す動作なのだが、それに生理的な嫌悪感を覚える者は少なくない。

胴体の横から四足ある見た目からは想像出来ないが、鍛錬をしていない成人男性が本気で走った時と同じくらいの速さを出す。

肉食であるために子供だけではなく、戦い方を学んでいない大人にとっても危険な存在である。

戦う術を知っている者なら余裕で倒せる魔物なのだが、追われて

いることを考えるとローブの人物は一般人であるのだろうかとかとコウは考える。

しかし、その予想は直ぐに覆された。

コウから見て丁度身体に隠れて見えない側に持っていた杖を、ローブの人物が振り回して牽制し始めたのだ。

望遠鏡を使っているが距離がある上にフードを深々と被っているので、詳しい身長や年齢、性別などは分からないが彼の人物は魔術師である可能性が高い。

「爬虫類の数は……十匹か。なんで魔物がここに？」

コウは望遠鏡を覗きながら、思いついたことを片っ端から並べる。疑問は尽きない。

ウィールス平原は魔物が生息していない安全な地帯なのだ。

それ故に魔物——しかも群れと言える数でいるのはおかしいことである。

それに魔術師が一人で戦っていること自体があり得ない話だ。

何故なら術を唱えても完成する前に攻撃を喰らえば、当然そのままやられてしまうわけであり、対魔術師戦闘においては詠唱中に潰すのが常套手段である。

故に魔術師は基本的に術を唱える間、自分を守ってくれる前衛を相方にして戦うものだ。

魔術師が一人で戦っている場合は一人で戦う自信があるか、やむを得ない理由で一人であるかである。

現在コウの視線の先で逃げ回る魔術師の様子を見れば、後者か或いは前者から後者へと変わったかである。

「自信満々で一人で突っ込んで駄目でした。とかだったら笑えないな」

逃げ惑う魔術師を見つめたままコウは呟く。

視線の先で魔術師は未だ窮地から脱していない。

魔術師はある程度優秀らしく、ただ杖を振り回すだけでなく、詠唱を必要としない初級魔術により杖の先に火を灯している。

自然界に住む生物は基本的に火を恐れるのでそれは効果的と言えた。

しかし、それも限界が近づいて来ている。

「時間をかけすぎたな。火を恐れなくなってきた」

コウがぼつりと言葉を漏らす。

事実、ドリークたちは向けられる熱源に脅威がないと思い始めているようだ。

火を恐れていたせいで遅くなっていた追いかける速さが、段々と速くなり始めているように見える。

魔術師の方もそれに気づいたのか、大分焦っているようで全体的な動きが乱雑になっている。

今まで静観していたコウだったが、それを確認すると立ち上がった。

まるで自分の事のように魔術師を案じて焦るロンに、何も言わずに望遠鏡を投げ返す。

そしてガラクタの中にすっかり溶け込んでいたものを山が崩れないように慎重に取り出す。

コウは取り出したものの先端を御者台につけ、自分の前に立てる

ようにした。

それは連れ出された際、財布以外に唯一持ち出したものだった。横ではロンはその様子を何も言わずに見守っている。

それは一振りの剣。

見た目はコウが着るローブ以外の服装に釣りあってしまう安っぽいものだった。

柄より先の長さは六十センチメートル程で、刃の厚さも従来のものに比べて特別変わった様子はない。

コウが僅かに剣を抜き刃の状態を確認する。

その目は興奮など微塵に感じられな。それどころか冷淡といえるほどである。

コウは直ぐに鞘へと収めたが、抜いた際に見えた刃も鈍い輝きを持つだけで特別は感じなかった。

鞘を含めて剣の端から端まで見ても意匠はなく、柄の部分に布が巻かれている事だけが唯一特筆出来る点だろう。

持ち主と同じような見た目は極々普通の剣。

実際、それは少し前にコウが街の武具屋で、安売りしていた物の中で更に一番安価だったものを購入したものだ。

しかし、コウがその剣を持った瞬間、ロンにはその剣が何よりも力のある物に思えてならなかった。

その剣が実は名剣であるという隠された事実はない。ロンが持てばその剣は見た目通りの安物の刃物になるだろう。

それでもロンは思わず生唾を飲み込んでしまうのだ。

コウはロンの様子に気づいているのかどうかは分からない。

ドリーク達の方へ目を向けたままコウは口を開いた。

「流石に人命が掛かっていると見過ごせないよな」

そう言ってから剣を腰に帶く。

口調こそ軽いがコウの表情は真剣そのものである。

「ということは、助けに行くわけだな！」

ロンは「良かったあ」などと続ける。

先ほどは別にコウを恐れたりしたわけではない。ただその存在感到にただ飲まれただけである。

コウに悪意がないと分かっているロンだからこそ、直ぐに態度を崩せるのだった。

コウもコウで気にした様子はない。

むしろ助けに行くことに安堵するロンの態度に、まるで行かない可能性があったかと感じ『こいつは普段の俺のことを何だと思っているんだ?』と内心想うだけである。

コウはふと言うことがあったと思い出す。

「お前の事だから大丈夫だと思うが、念のため言っておく……」

ロンは最初、きょとんとしていたが、徐々に理解の色を表情に浮かべると、コウの言葉を制するように返事をした。

「安心しろって、いつも通りに、だろ？」

第三者が聞けば理解出来ないであろうやり取り。

しかし、この二人にはそれで十分であるらしく、コウも何も言わずに頷き『念話』を展開する。

『そのの爬虫類に追われている奴、聞こえるか?』

その出会いが、
グランスウォールの歴史に残る出会いになるとは
知らずに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8930z/>

グランスウォールの英雄

2011年12月28日01時28分発行